公益財団法人 日本英語検定協会 委託研究最終報告書

委託研究課題名:大学英語教育の質保証に向けた EAP カリキュラム実態把握調査 (2014 年 10 月 1 日~2016 年 3 月 31 日)

研究代表者: 寺内 一(高千穂大学)

田地野 彰 (京都大学), 金丸 敏幸 (京都大学), 高橋 幸 (京都大学) 飯島 優雅 (獨協大学), 渡辺 敦子 (国際基督教大学),

マスワナ 紗矢子 (お茶の水女子大学), 堀 晋也 (早稲田大学), 渡 寛法 (早稲田大学)

1. 研究の概要

世界的に活躍する専門家や研究者,さらには国際競争力のある人材を育成するためには、国際標準に適った大学教育のシステムの確立が求められる。日本の大学の英語教育では、米国における The Commission on English Language Program Accreditation に相当する教育機関に対する認証制度が存在せず、教育改善(FD)活動や外部試験の結果などで教育の質を測るケースがほとんどである。しかしながら、こうした活動や

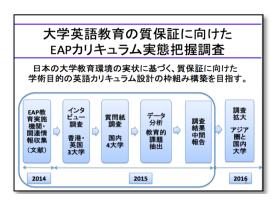


図 本研究の概要

外部試験で測る英語運用能力は限定的なものであり、仮にその結果が十分なものであったとしても、それを大学の定める目標に対して教育が十分に機能したためであると結論づけることはできない。教育の質を保証しようとする場合、適切なカリキュラムを導入し、それに基づいたコースの整備によってはじめて十分に教育が機能しているかを判断することが可能となる。とりわけ、カリキュラムのように多くの人間が関わる対象を分析する際には、過剰に個々の問題に捕らわれることのないよう、システム論的な視点が重要となる。

本研究は、日本の大学で実施されている英語教育のうち、特に研究・専門教育に重要となる学術目的の英語(English for Academic Purposes: 以下 EAP)教育を対象とし、EAP カリキュラムの現状と課題の把握に向けて全国的な実態調査を実施することである(上図参照)。さらに、実態調査の結果を基に、日本の大学の教育環境や学習者要因などを考慮しながら、教授法や教材、評価法に繋がるカリキュラム案を構築し、それらを国内の大学で共有するための基盤づくりを目的としている。2014年度から2015年度の研究活動は、2016年度以降の全国規模での実態調査のための準備段階という位置付けである。

2014年度は本研究の前半過程として,国内のEAP教育の現状を把握するため,EAP教育を実施している大学のなかから京都大学,獨協大学,早稲田大学,国際基督教大学に焦点

をあて、カリキュラムとコース、ならびに技能について、公開されている情報(報告書、ウェブページ等)と関係者へのインタビューをもとに予備調査を実施した。また、日本の EAP 教育への示唆を得るため、英国と香港それぞれで EAP カリキュラムを実施しているウォーリック大学、香港大学、香港理工大学についての情報を収集し、関係者にインタビュー調査を行った。2015 年度は、大規模調査に向けて調査票を使用した予備調査を実施し、質問項目の精査および調査結果の分析を行い、今後の発展的研究の準備を完了した。

2. 主な発表論文等

- ① 飯島優雅,マスワナ紗矢子,田地野彰,金丸敏幸,高橋幸,堀晋也,渡寛法,渡辺敦子,寺内一. (EAP 研究会ポスタープレゼンテーション).大学英語教育学会第 54 回 (2015 年度) 国際大会, 鹿児島大学, 2015 年 8 月 30 日.
- ② Watari, H., Hori, S., & Kanamaru, T. (共同口頭発表). EAP Curriculum in Japanese Universities: A Preliminary Survey. International Conference on English across the curriculum 2015, 香港理工大学, 2015 年 12 月 14 日.
- ③ 飯島優雅,渡辺敦子,マスワナ紗矢子,渡寛法,堀晋也,高橋幸,金丸敏幸,田地野彰,寺内一. (共同口頭発表).日本の大学における学術英語カリキュラムの現状と課題:実態調査結果を踏まえて.『第22回大学教育研究フォーラム発表論文集』(270-271頁),京都大学,2016年3月18日.

JACET EAP研究会

JACET SIG ON ENGLISH FOR ACADEMIC PURPOSES

飯島 優雅(獨協大学)(代表) マスワナ 紗矢子(お茶の水女子大学)(副代表) 田地野 彰(京都大学) 金丸 敏幸(京都大学) 高橋 幸(京都大学)

堀 晋也(早稲田大学) 渡 寛法(早稲田大学) 渡辺 敦子(国際基督教大学) 寺内 一(高千穂大学)

研究テーマ

国内および海外の大学における学術英語教育カリキュラムの現状把握とニーズ分析

目的

本研究会では、学部・大学院レベルの研究および教育で重要となる、学術英語(English for Academic Purposes: EAP)教育に関する理論と 指導実践の研究を主な目的とする。

- 1. 国内および海外の大学におけるEAP教育の諸相(カリキュラム、コース設計、教授法、教材、評価法、教員養成など)を対象に、関連分野の 知見を取り入れた研究、ならびに国内外の学会等で研究成果の共有を行う。 2. 国際的に通用するEAP教育の研究と指導実践に関する体系的な知識の構築を継続し、新たなEAPカリキュラム導入、大学英語教育の質
- の改善、国際社会で通用する学生の英語運用能力の養成などへの貢献を目指す。

研究会設立までの活動

- ・日本国内のEAP教育の現状把握のための調査(第一部)
- カリキュラム、コース、対象とする技能、授業外サポート体制などに関する公開情報(報告書、Webページ等)の収集と関係者へのインタビュー ・日本のEAP教育への示唆を得るための調査(第二部)

英国と香港におけるEAPカリキュラムに関する情報収集、関係者へのインタビュー(2015年2月、3月)

第一部:国内の大学のEAPカリキュラム調査

調査大学(学部)・英語課程名

- 1. 京都大学 全学共通科目外国語科目群英語科目
- 2. 獨協大学 全学共通カリキュラム外国語科目群英語部門
- 3. 早稲田大学 理工学術院英語教育センター
- 4. 国際基督教大学 リベラルアーツ英語プログラム

第二部:海外の大学のEAPカリキュラム調査

大学、担当部局	ウォーリック大学 応用言語学センター(CAL)	香港大学 応用英語研究センター(CAES)	香港理工大学 英語センター(ELC)
カリキュラム (必修単位数、 学生数、主な 科目/コースの	主に修士課程の外国人学生を対象 学生が自主的に科目を履修 修了テスト、言語テストの点数目標などはない Pre-sessional English Course: 夏期休暇中の学期前英語コース(6 or 10週間)。 対象学生約2000人(pre-sessionalは約300人) 運営は専任人、教員は7人。クラスサイズは1ク ラス約15-20人。教材は独自開発のものと市販の 教科書を利用。 In-sessional English Class: 在学生を対象とする 学期内の英語スキル科目。汎用的なEAPスキル 対象科目と、専攻分野特有のリテラシーを学ぶ Programme in English for Postgraduate Studies: 修士課程の入学希望者対象	1年生対象の全学共通科目CUE(Core University English course):6単位 2年生以上対象の専門英語科目ED(English in the Discipline):6単位 CUE:対象学生約8,000名、教員48名。共通シラバスを使用、コース開発チームが教材とシラバスを作成。1クラス最大20名。アカデミックライティング能力の育成がメイン。ED:専門分野で求められるジャンルに基づき、各学部の協力のもと、CAES教員が授業を開発、運営。	LCR(Language & Communication Requirement): 2料目6単位、CAR(Cluster Areas Requirement): extensive reading, extensive writing を含む科目を1つず DSR(Discipline-Specific Requirement): 最低2単位 LCR: 習熟度に対応。レベル・目的が異なる科目を複数用意。 CAR: 多分野にまたがる科目。多様な授業形態の組み合わせ(1クラス約20名)。 共通シラバスで使用し、教材はELCが作成。オンライン学習・指導システムを積極的に取り入れる。 DSR: 将来を要なジャンルを学習。ニーズ分析1基づく教材をELCが作成。
授業外サポート	アカデミック英語スキル自主学習用のオンライン 教材 (Learning English On-Line at Warwick) の 提供	・夏季休暇に、発音、スピーキング、IELTS対策な どの Summer workshop を開催 ・自宅学習用のサイト運営、ネイティブの学生と チャットセッション ・CAES所属の修士の学生による学習相談	・Speaking Assistance Program、Writing Assistance Programの運営とチューターによる 学習相談 ・学習資料の提供、学生の活動グループの取り とめ。
質保証への 取り組み	4年に1度 British Councilの認証、教員のピアオブザベーション、パフォーマンスレビューなど	学生の授業評価アンケート、CAESの授業評価、 教師ミーティング、ピアの授業観察	全学生・教員参加の授業評価、教員間の授業観察。学術、産業界からの外部アドバイザー

The University of Warwick



ELCのAssociate Director, Dr. Chenと



今後の活動予定

- EAPカリキュラムに関する関係者への質問紙とインタビュー項目の作成、および国内の大学(京都大学、獨協大学、国際基督教大学、早稲田 大学)における予備調査。
- 調査結果のまとめを国内外の学会にて発表
- 調査結果を基にしたEAP教育の現状と課題に関する研究報告書を来年度以降に発行。

(本研究は公益財団法人日本英語検定協会委託研究課題(2014年度-2015年度)に採択されております。)

代表連絡先:飯島 優雅(獨協大学) yiijima@dokkyo.ac.jp

3. 研究の成果

日本の大学における学術英語カリキュラムの現状と課題:予備調査の結果を踏まえて

3.1. 背景と目的

大学教育の国際化への志向とともに、専門分野を学ぶために必要な英語力養成の観点から、学士課程における EAP 教育の必要性が社会的に認識されるようになった(『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』文部科学省、2003;『学士課程教育の構築に向けて』中央教育審議会、2008; 『提言 21 世紀の教養と教養教育』日本学術会議、2010)。また、大学英語教育の研究者の間でも EAP の推進が主張されている(例 田地野・水光、2005; 神保、2010)。

日本では、2011 年から小学 5 年生から英語による外国語活動が導入され、これによって生徒は高校卒業までに 8 年間英語を勉強することとなった。そして大学では主に入学後の 2 年間に英語教育が実施されているが、日本の大学では、EAP に焦点が置かれていることは稀であり、多くの大学のカリキュラムは English for General Purposes(もしくは English for No Purpose)とも言われている(田地野・水光、2005)。また、学生の英語力も十分なものとは言い難く、例えば 2014 年の TOEFL iBT スコアにおいて、日本はアジア 30 か国中の 27 位で最下位グループに位置している(https://www.ets.org/s/toefl/pdf/94227_unlweb.pdf)。

日本の高等教育の課題として、文部科学省が推進している大学の国際化が挙げられる。 国際競争力の向上、海外の大学との交流推進、グローバル人材育成の促進などを通して大 学の国際化が実現されると考え、文部科学省は2011年に「グローバル30」、2014年からは 「スーパーグローバル大学創成支援」などのプロジェクトを推進している。「グローバル30」 では、英語で行う授業の導入、留学生30万人計画の推進、国際化を中心的に担う30大学 の開発などが掲げられており、それに伴う英語教育の改善も喫緊の課題となっている。

このように、以前からの社会的要請もあり、導入の意義が認められているにもかかわらず、日本において EAP カリキュラムを実施する大学はまだ少なく、同じアジア圏でも香港の EAP 教育の充実ぶりとは対照的である。こうした遅れの背景には、大学英語教育のカリキュラム設計・運営や教員養成に関して参考となる枠組みが整備されていない現状がある(参照: British Association of Lecturers in English for Academic Purposes、以下 BALEAP という英国の EAP 学会の「認証基準」「EAP 教員の資質能力枠組み」)。確かに英語圏の EAP モデルからは有用な示唆を得られるが(例 Jordan, 1997; Hyland, 2006)、ニーズや教育環境が根本的に異なるため、そのまま日本に応用しても機能しないことが予想される。国内での高度な英語力の養成には、日本の大学教育環境に合った EAP 教育の枠組みが必要であると考えられる。

こうした問題意識を基に、本研究チームは2014年から国内と海外(英国、香港)の大学におけるEAPカリキュラムの現状と課題を把握するための調査を行っている。本報告書では、既に実績がある国内4大学を対象とした予備調査の結果を報告し、教育改善に向けた

課題を検討する。

3.2. EAP 教育実態の予備調査

本研究は"A Survey Study of Current EAP Curricula: Towards Quality Assurance of University English Education in Japan"という合計 4年間を予定としたプロジェクトの前半約 2年間 (2014年 10月から 2016年 3月まで)に行われた予備調査である。ここでは,公表されている資料(論文,報告書,大学 HP など関連文献)をもとに EAP カリキュラムに関するデータを収集し,概要を把握したのち,香港および英国の大学でインタビュー調査を行った。その結果を参考に質問紙を作成し,パイロット調査を実施し質問項目を完成させた。今回の調査対象は国立大学(1校)と私立大学(3校)である(表 1 参照)。

 国立 K 大学
 私立 D 大学
 私立 I 大学
 私立 W 大学

 共通課程
 全学共通課程
 全学共通課程
 全学共通課程
 学部共通課程

 EAP 導入年
 2006 年
 2006 年
 1960 年
 2007 年

表 1 調査対象大学

これらの大学での EAP 教育の現状を把握するため、カリキュラム運営担当者に対する質問 紙調査を実施した (2015 年 11 月から 12 月)。また回答の内容について対面あるいは E メールでフォローアップのインタビューも行った。

質問紙は15のカテゴリーから構成され(表2参照),合計で53項目になる。例えば、カテゴリー5は、EAPカリキュラムの教育理念についての質問であるが、具体的な理念とその共有がいかに行われているかなどを問う下位4項目が付随している。

表 2 質問紙概要

	概要
1-4	回答者と大学の属性
5	英語教育課程の教育理念・目的
6	必修・選択必修・選択英語科目
7	英語教育課程の対象・規模
8	英語科目担当教員
9	科目・授業シラバス
10	教科書・補助教材
11	授業実践
12	質保証の取組み
13	非常勤教員採用条件
14	授業外英語学習支援
15	単位認定

3.3. 結果と考察

「平成 25 年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要)」(文部科学省, 2015)から,「カリキュラム編成上の工夫」と「カリキュラムの多様性:外国語」の学部段階の実施状況を示す項目群を参考に分析を行った。また,グローバル評価基準の一つとして,前述のイギリス EAP 学会が提示している EAP プログラム認証の枠組み (the British Association of Lecturers in English for Academic Purposes, the BALEAP accreditation scheme) を参照し検討を加えた。この枠組みは,プログラムの評価において 5 分野(組織的文脈,コース管理,コースデザイン,学習と教育,評価と進歩)合計 50 を超える評価項目を設けている。分析の結果,対象の大学について主に 5 項目: (1) 教育理念, (2) コース目的, (3) EAP 授業実施,(4) 英語教員と専門教員との協働,(5) 質の保証から新たな知見が得られた。以下,該当箇所を抜粋して結果を紹介する。

(1) 教育理念

英語に関する教育目的は、全学共通課程を設置する大学では、多様な専門分野に共通する一般学術目的の英語(English for General Academic Purposes, EGAP)、学部共通課程を設置する大学では、特定学術目的の英語(English for Specific Academic Purposes, ESAP)のスキル養成となっている(表 3)。今回後者に該当したのは、W大学の理工学部である。ここでは学部レベルで特定学術目的の英語を教え、大学院で必要な英語の準備という 6 年間を見据えたカリキュラム編成となっている。こうした EGAP と ESAP の観点は、BALEAP 評価基準の組織的文脈の分野に関連している。BALEAP 評価では、コース管理者と専門教員との綿密なコミュニケーションと支援体制が重要視されている。しかし、インタビューからうかがえたことは、日本の EAP は高校英語の最終地点とみなされることがほとんどであり、専門英語のスタート地点という認識ではないということである。

表 3 教育理念

	国立 K 大学	私立D大学	私立Ⅰ大学	私立W 大学
教育目的	EGAP	EGAP	EGAP	ESAP
	国際的に活躍す	自律的な学習者	English for	エンジニアおよ
	る研究者を育成	の育成	Liberal Arts	び理系研究者の
			スタディ・スキ	育成
			ルの養成	
履修年数	2年	2-3 年	2年集中	3年
学生数/学年	3000 人	1500 人	580 人	1800 人

(2) コース目標

日本の大学では、伝統的に教員が担当科目の目標を設定してきたが、最近では大学が共通の目標を設定する傾向にある。背景の一つには、他国とは対照的に非常勤講師の割合が高いことが挙げられる(表4参照)。さらに現在では質保証のために共通目標を設定する重要性が認識されている。そして、到達水準は外部英語検定試験(TOEIC, TOEFL など)の点数でなく、Can-do List など能力記述文で提示しているのが特筆すべき点であろう。

表 4 EAP コースについて

	国立K大学	私立D大学	私立Ⅰ大学	私立W 大学
到達目標の目的	シラバス・デザイン,教材選定,評価において共通コース目標を			
	ガイドラインとして	て使用		
到達目標の提示	-	カリキュラム責任	者がコースごとに	こコース目標を
		作成し Can-do List	で提示	
教員数	239 人	84 人	37 人	70 人
(非常勤教員率)	(50-70%)	(70%以上)	(10-30%)	(70%以上)
外国人教員比率	10%未満	30-50%未満	50-70%未満	70%以上
(内非英語母語	(10%未満)	(10-30%未満)	(10%未満)	(10%未満)
話者率)				
開講コマ数/年	478	744	890	500
学生数/クラス	35-210 人	30 人以下	22 人	30-45 人
習熟度別クラス	_	TOEIC IP	TOEFL ITP 等	TOEIC IP
編成				
使用言語	_	必要に応じて	原則として	原則として
ポリシー		日本語使用	教員も学生も	教員も学生も
			英語のみ	英語のみ

(3) EAP 授業実施

実際の EAP 授業実施は表 5 に示されているように、日本の大学ではアカデミックスキルの向上と同時に、一般的な英語言語能力の向上が授業の目的として組み込まれている。

表 5 EAP 授業実施

	国立 K 大学	私立 D 大学	私立Ⅰ大学	私立W 大学		
対象スキル	4技能をアカデミックスキルとして教授(例 Academic Lecture Comprehension)					
優先スキル	アカデミックライティング					
教材	大学独自の教材はあるものの特定の授業に限定され、多くは市販の教材					

学生には包括的な英語運用能力の向上が必要とされている一方で、大学には教材作成を専門とする人材が不足しているために、大学独自の教材は、香港で調査した大学とは対照的に限定的なものとなっている。

今回の主要な調査対象ではないが、授業外学習支援については各大学で実施されている。 4 大学共通の特徴として挙げられるのは、支援が必ずしも EAP カリキュラムの授業内容と 関連づけられておらず、学生個々人の相談内容に対応していることである。授業外支援の 例として、K 大学と D 大学では学習相談が行われ、W 大学と I 大学ではライティング・センターを設置しているなどがある。W 大学のライティング・センターでは、自律した書き 手を育てるという理念のもと、全国に先駆けて複数言語による支援を行っている(表 6 参 照)。

表6 私立 W 大学ライティング・センターでの使用言語

ライティングでの使用言語	相談セッションでの使用言語
英語	日本語
英語	英語
英語	中国語

(4) 英語教員と専門教員の協働

英語教員と専門教員の協働については、大学によって違いが見られた(表7参照)。

表 7 EGAP から ESAP へ

	国立K大学	私立D大学	私立I大学	私立W 大学
専門科目との連携	一部〇	一部〇	_	0

I大学はESAPを提供せず、すべての授業を英語で行い、EAP学習はEGAPプログラムの2年で完了するという独自のカリキュラムを設置している。W大学では、専門科目の教員が英語カリキュラム作成にも携わっているため、ESAPカリキュラムにEGAPが含まれている。ただし全体的にはEGAP科目と専門英語科目内容の実質的な連携が弱いと言える。

(5) 質保証

全大学で質保証の取り組みが行われており(表8参照),たとえば,教育方針は教員同士だけでなく学生にも共有されている(例:ウェブサイト,新任教員オリエンテーション,教員打ち合わせ)。シラバスの評価は、プログラム担当者によるシラバスの点検であり、場合によっては担当教員に改善を求めることもある。プロフェッショナル・ディベロプメントはFDを含み、ミーティングやワークショップがあるが、その内容は、教授法関連よりもむしろ、機器の扱い方や大学のオンラインシステムの説明等が多い。一方でプログラム評

価においては大学間で違いが見られ、I大学において内部、外部双方による評価が、W大学では外部による評価が行われている。

表 8 質保証

	国立 K 大学	私立 D 大学	私立I大学	私立W 大学
FD ミーティング実施	_	0	0	\circ
教員同士の授業見学	_	_	0	0
方針の共有	0	0	0	0
シラバス評価	0	0	0	0
修了時外部英語試験受験	_	TOEIC	IELTS	_
カリキュラム内部評価	_	_	0	_
カリキュラム外部評価	_	_	0	0

文部科学省は高等教育での外部からのプログラム評価の重要性を強調しており、これは BALEAP のカリキュラム認証評価基準のコース管理の分野にも関連する重要な項目である。しかし、プログラム評価の重要性はまだ広く認識されておらず、この点で、2014 年度に本研究チームがインタビュー調査を行った、香港の 2 大学の英語プログラムとは大きく異なる。香港大学は Quality Assurance Committee、香港理工大学は Center Academic Advisor という、内部評価と外部評価のシステムがプログラム運営組織に組み込まれている。日本では、授業評価は文部科学省がその重要性を強調し、多くの大学で実施されているが、その結果がプログラムの改善に十分に活かされていない問題も指摘されている。これについては今後の本調査で調べる必要があり、評価の低い教員に対する指導についても検討対象としたい。

3.4 まとめ

今回調査した4大学は、独自にEAPカリキュラムを開発・実施しているが、多くの場合それはEGAPカリキュラムを意味していることが示唆される。本来EAPは各専門領域特有の言語使用法とコミュニケーションスタイルの習得が最終目標であり、他国では英語教員と専門分野教員の協力によるニーズ分析と教材開発、EGAP-ESAP科目間の組織的連携が実践されているが、調査対象のうち3大学ではそれが確認されなかった。その理由として、日本ではEAPを行うにもそれに対応できる英語力を有さない学生も多く、卒業論文や授業で英語が必要とされる機会も少ないことが挙げられる。もうひとつの重要な知見は、質保証に関するものである。その必要性は認識されており、各大学は共通して理念の共有やシラバス評価といった取り組みは行っているものの、プログラム評価の実施は1校であった。インタビューから、継続して質を改善するための支援システムやEAPプログラムの説明責任においては、取り組みが十分でないことがうかがえた。

以上の調査結果により、日本の EAP カリキュラムは発展途上と推測される。今後は調査の規模を全国に拡大し、日本の大学の教育環境の実状に基づく、質保証に向けた学術英語カリキュラムの枠組み構築を目指したい。予備調査では EAP カリキュラムの担当者(部局)へのコンタクトが難しい問題もあったが、2016 年度からの本調査では、大学英語教育学会のもつ会員ネットワークを活用した調査を実施して、日本の文脈に見合った EAP モデルの提供を目指していきたい。

参考文献

神保尚武 (2010)「言語政策と大学英語教育」森住衛・神保尚武・岡田伸夫・寺内一(編)『大学英語教育学—その方向性と諸分野』, pp.31-39. 大修館書店.

田地野彰・水光雅則 (2005) 「大学英語教育への提言」 竹蓋幸夫・水光雅則(編)『これからの大学英語教育』, pp. 1-46. 岩波書店.

中央教育審議会 (2008) 『学士課程教育の構築に向けて』

日本学術会議 (2010)『大学教育の分野別質保障の在り方について』

日本学術会議 日本の展望委員会 知の創造分科会 (2010)『提言 21 世紀の教養と教養教育』 文部科学省 (2003)『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』

文部科学省 高等教育局大学振興課 大学改革推進室 (2015) 『平成 25 年度の大学における 教育内容等の改革状況について (概要)』.

Hyland, K. (2006) *English for Academic Purposes: An Advanced Resource Book*. Oxon, UK: Routledge.

Jordan, R. R. (1997) *English for academic purposes: A guide and resource book for teachers.* Cambridge, UK: Cambridge University Press.